家々稱證本之本乍書入以墨滅歌今別書之

これは、卷々の中に、左の歌ども、家々に藏する證據とすべき善本に書き入れられながら、墨もて滅してありしなり。それを、定家卿、校定本を作る時に拔き出して、こゝに書き集めたりといふなり。畢竟、證本といふとも、猶、區々の誤ども多かりしならむ。まことに滅すべきも見え、滅すまじきも見えたり。「わぎもこにあふ坂山のしのすゝき」、及び、以下の歌どもは、必ず除くべきものぞ。

## 卷第十　物名部

ひぐらし　　つらゆき

杣人は宮木ひくらしあしひきの山のやまびこよびとよむなり

在三郭公下空蟬上

（釋）○杣人　材木を樵る山を杣山といひ、樵る人を杣人といふ。○宮木　大宮を造るに用る木材なり。

この歌は、本集中の或者に優ること數等。この人の作中にても、屈指すべきものの一つなり。

勝臣

かけりても何をかたまのきても見むからは焔となりにし物を　（九八六）

をかたまの木　友則下

（釋）○たま　魂なり○から　亡骸なり

くれのおも　つらゆき

こし時とこひつゝをれば夕ぐれのおも影にのみ見え渡るかな

忍草　利貞下

（釋）くれのおも　和名抄に、「懐香、一名懐芸、和名、久禮乃於毛」とあり。○こし時　思ふ人の來し時なり。

おきのゐ　みやこじま　をののこまち

おきのゐて身をやくよりも悲しきはみやこゐまべの別なりけり

からこと　清行下

（釋）おきのゐ○みやこじま　所在不明。伊勢語に、「昔、みちのくにて云々、おきのゐみやこじまといふ所にて」と書きて、この歌あり。かくては、一ところのやうに聞ゆ。物名に、かくよむからは、異どころならむ。陸奥といへるも、覺束なし。○おきのゐて　熾火の著きゐてなり。○みやこしまべ　都と島邊との意。



そめどの　あはだ　あやもち

うきめをばよそめとのみぞ遁れゆく雲のあはだつ山の麓に

此歌は、水のをのみかどの、そめどのより、あはだへうつりたまうける時によめる。

桂宮の下

（釋）そめどの　染殿は、「拾芥抄に、「正親町北、京極西二町」とあり。忠仁公藤原良房の家なりしを、清和帝、外宮とせられて、貞觀十八年に行幸ありき。○あはだ　京都の三條より、逢阪山の方へいづる所にて、粟田山あり。○あはだつ　淡々しく浮き立つこと、○左註は、三代實錄、元慶三年五月四日の條に、太上天皇、清和院より、粟田院へ移り給ふこと見えたり。太上天皇は清和帝、清和院は、染殿とおなじとぞ。

## 卷第十一

奥山の菅の根しのぎふる雪の下

けふ人をこふるこゝろは大井川ながるゝ水におとらざりけり　（九八七）

（釋）三四の句、宗千集に、飛鳥川流るゝみをにとあり。

わぎもこにあふ坂山のゐの薄ほにはいでずもこひわたるかな　（九八八）

（釋）○わぎもこにあふ坂山　逢ふに、相阪をかく。上句は序。萬葉集十一、わぎも子に相坂山のしのすゝき穂には咲き出ず戀ひ渡るかも をよみ誤れるものなり。

## 卷第十三

こひしくば下にを思へ紫のの下

犬がみのとこの山なるいさや川いさと答へよわが名もらすな

此歌は、ある人、あめのみかど、淡海の采女にたまへると。

（釋）○犬かみのとこの山　近江國犬上郡。○いさや川　犬上川のこと。○いさ　不知なり。○左注あめのみかどは、天智帝を申す。

上句は序にて、もし、人が問はば、いさ知らずと答へよ、わが名を知らすなの意なり。萬葉集十一、詠者不詳、

狗上の鳥籠の山なるいさや河いさとをきこせわが名のらすな

の訓みたがへなるが、意は違はず。左注は、據なき說なり。

かへし　うねべの奉れる

山しなの音羽の瀧のおとにだに人のゐるべくわが戀ひめやも

（釋）戀三に、「音羽の山の」とあるを、瀧とかへたるのみ。

## 卷第十四

思ふてふことの葉のみや秋をへての下

そとほり姫のひとりゐみかどを戀ひ奉りて

わがせこが來べき宵なりさゝがにの蜘のふるまひかねてゐるしも

（釋）そとほり姫の云々　日本紀允恭紀に、天皇、衣通姫を、藤原の宮に住ませ給ひて、たま〳〵行幸ありて、姫のおはすやうを伺ひませるを知らで、この御歌よませ給へること見えたり。但、三句以下「さゝがねの蜘のおこなひこよひしるしも」とあり。○ふるまひ　擧動なり。さて、蜘の、衣などにかゝるは、人の來る前兆ぞといふ諺ありしなるべし。この事、戀五「今しはと思ひしものをさゝがにの」の條にいへり。

深養父　戀しとはたが名づけけむことならむの下

道ちらばつみにも行かむ住のえの岸におふてふ戀わすれ草

（釋）○戀わすれ草　蕺草に、戀と冠せたるは、人忘草、憂さ忘草の類なり。さて、萬葉集七、いとまあらは拾ひてゆかむ住の江の岸によるとふ戀わすれ貝を、すこしかへたるのみ。貫之のこゝわざとも覺えず。





# 古今和歌集序

紀淑望

夫和歌者、託其根於心地、發其花於詞林者也、人之在世不能無爲、思慮易遷、哀樂相變、感於志、詠形於言、是以、逸者其聲樂、怨者其吟悲、可以述懷、可以發憤、動天地、感鬼神、化人倫、和夫婦、莫宜於和歌、和歌有六義、一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌、若夫春鶯之囀花中、秋蟬之吟樹上、雖無曲折、各發歌謠、物皆有之、自然之理也、然而、神世七代、時質人淳、情欲無分、和歌未作、逮于素盞嗚尊、到出雲國、始有三十一字之詠、今反歌之作也、其後、雖天神之孫、海童之女、莫不以和歌通情者、爰及人代、此風大興、長歌、短歌、旋頭、混本之類、雜體非一、源流漸繁、譬猶拂雲樹生自寸苗之煙、浮天浪、起於一滴之露、至如難波津之仁獻　天皇、富緒川之篇報太子、或事關神異、或

興入幽玄、但見上古之歌、多存古質之語、未爲耳目之翫、徒爲教戒之端、古天子、每良辰美景、詔待臣預宴筵者、獻和歌、君臣之情、由斯可見、賢愚之性、於是相分、所以隨民之欲、擇士之才也、自大津皇子之初作詩賦、詞人才子、慕風繼塵、移彼漢家之字、化我日域之俗、民業一改、和歌漸衰、然猶有先師柿本大夫者、高振神妙之思、獨步古今之間、有山邊赤人者、並和歌仙也、其餘業和歌者、綿綿不絕、及彼時變澆漓、人貴奢淫、浮詞雲興、艶流泉涌、其實皆落、其花孤榮、至有好色之家、以之爲花鳥之使、乞食之客、以之爲活計之媒、故半爲婦人之右、難進丈夫之前、近代存古風者、纔二三人、然長短不同、論以可辨、花山僧正、尤得歌體、然其詞華而少實、如圖畫好女、徒動人情、在原中將之歌、其情有餘、其詞不足、如萎花雖少彩色、而有薰香、文琳巧





詠物、然其體近俗、如賈人之著鮮衣、宇治山僧喜撰、其詞花麗而首尾停滯、如望秋月遇曉雲、小野小町之歌、古衣通姫之流也、然艶而無氣力、如病婦之著花粉、大友黑主之歌、古猿丸大夫之次也、頗有逸興、而躰甚鄙、如田夫之息花前也、此外、氏姓流聞者、不可勝計、其大底、皆以艶爲基、不知歌之趣者也、俗人爭事榮利、不用詠和歌、悲哉、雖貴兼相將、富餘金錢、而骨未腐土中、名先滅於世上、適爲後世被知者、唯和歌之人而已、何者、語近人耳、義慣神明也、昔　平城天子詔侍臣、令撰萬葉集、自爾以來、時歷十代、數過百年、其後、和歌棄不被採、雖風流如野宰相、輕情如在納言、而皆以他才聞、不以斯道顯、伏惟　陛下御宇、于今九載、仁流秋津洲之外、惠茂筑波山之陰、淵變爲瀨之聲、寂々閉口、砂長爲巖之頌、洋々滿耳、思繼既絕之風、欲興

久廢之道、爰詔大内記紀友則、御書所預紀貫之、前甲斐少目凡河内躬恒、右衞門府生壬生忠峯等、各献家集並古來舊歌、曰續萬葉集、於是、重有詔、部類所奉之歌、勒而爲二十卷、名曰古今和歌集、臣等、詞少春花之艶、名竊秋夜之長、況乎、進恐時俗之嘲、退慙才藝之拙、適遇和歌之中興、以樂吾道之再昌、嗟呼、人麿既沒、和歌不在斯哉、于時、延喜五年、歲次乙丑、四月十八日、臣貫之等謹序、

（上文、本朝文粹によりて是正したり）



# 作家列傳

本傳は、すべて、作家の氏をすてて、名によつて次第したり。氏名なきものは、官名、或は、稱呼を、もとのまゝに掲げつ。而して、排列の次第は、五十音圖の順によれり。

**アキミネ　秋岑**
美濃守紀善峯の子。六位。

**アサヤス　朝康**
文屋康秀の子。延喜中、大舍人大允、大膳少進を歷任す。

**アツユキ　篤行**
平氏。從五位上與我王の二子。寛平五年、文章生に補せられ、大和伊勢の掾より、國司を歷任して、筑前守兼大宰少貳に至り、延喜十年正月卒す。

**アツユキ　淳行**
伊香子氏。傳は未詳。

**アマネイコ　治子**
參議春澄善繩の女。眞觀の頃、正四位下典侍たり。

**アヤモチ**
傳未詳。

**アリスケ　有輔**
御春氏。延喜中、左衞門權少志、同權少尉となる。藤原敏行の家人にて、河内の人とぞ。貫之の集に、兼輔の兵衞佐が、加茂川の邊にて、この人の、甲斐へゆく餞宴をせしこと見えたり。

**アリスエ　有季**
文室氏。三代實錄貞觀五年三月の條に、「散位從五位上文屋有眞爲二下總守一」とあり。有眞は、訓アリマなるべし。さて、マの平假名、末の字の草なれば、誤りて有末と書けるを、更に有季としたるか。

**アリツネ　有常**
正四位下紀名虎の子。性淸醫にして、儀容あり。少時、仁明帝に侍奉したりき。官從四位下周防權守にいたり、元慶元年正月卒す。年六十三。

**アリトモ　有友**
又有朋。紀氏。仁明、文德、淸和、陽成の朝に仕へ、從五位下宮內少輔となり、元慶四年卒す。

**イウセン　幽仙**
右近將監藤原宗道の子。寛平七年律師となる。昌泰三年入滅す。仁和寺を建立して、別當たり。もと、慈覺大師の弟子なりしにより、昌泰二年、延曆寺の別當になさる。

**イセ　伊勢**

伊勢守藤原繁陰が女。七條后の宮人たる時、藤原仲平に通じ、又、宇多帝に寵愛せられ、寛平の末、皇子を誕すといふ。帝、位を退く時、伊勢、また退きて、五條の里第に居り、敦慶親王等と通じて、女中務を生む。歌は、當代女流の第一人なり。

イナバ　因幡

因幡守基世王の女。基世王は、二品仲野親王の子なり。

イマミチ　今道

布留氏。清和、陽成、光孝、宇多の朝に歴任し、仁和元年造酒正に、昌泰元年三河介に任ぜらる。

ウツク　龍

（クラを見よ）

ウリンキンノミコ　雲林院親王

仁明帝の皇子常康親王これなり。母は紀名虎の女種子。仁壽元年出家、貞觀十一年五月薨ず。雲林院は、この親王、その別業をすて、遍昭に付囑して、寺とせしところなれば、この號あり。

オキカゼ　興風

參議藤原資成の曾孫。院藤太と號す。延喜のはじめ治部少丞、上野大掾、下總權大掾、同十一年相模掾に任ぜらる。彈琴の師たり、管絃を能くす。

オト　乙

遠江介王生益成の女。益成は、元慶仁和の代の人なり。



オホヨリ　大頼

三代實錄、元慶元年の條に、石川朝臣箭口朝臣等奏して、先祖の蘇我氏の稱に返りて、並に宗岳朝臣を賜はらこと見えたり。さては、宗岳はソガと讀むべく、ムネナカとは讀むべからず。さて、大頼は算博士なり。

カゲノリノオホキミ　景式王

四品惟條親王の後なり。寛平九年、從四位下に叙せらる。

カチオン　勝臣

藤原氏。元慶七年阿波權掾に任ぜらる。

カネスケ　兼輔

右近中將藤原利基の子にして、兼茂の弟。從三位中納言に任ぜられ、承平三年二月薨ず。年五十七。加茂川の堤に家居せしより、世に堤中納言と呼ばる。

カネミノオホキミ　兼覽王

仁明帝の孫、國康親王の御子。神祇伯宮内卿正四位下にいたる。承平二年卒す。

カネモチ　兼茂

右近中將藤原利基の子。寛平中讃岐權掾より、藏人となり、延喜のはじめ、左衛門佐侍從、同二十三年參議左衛門督にて卒す。



カンキン　閑院

延喜頃の人にて、命婦なりとぞ。

カンキンノゴノミコ　閑院の五の皇女

嵯峨帝の妃均子内親王といへる說もあれど、歌體を案ずるに、今すこし、時代下れりと覺し。傳詳ならず。

キセン　喜撰

又基泉とかく。眞言宗の僧にて、山城國乙訓郡の人とぞ。宇治山に、跡を匿せり。世に喜撰式（金針とも）とて、歌の疵弊をいへる書あり。僞書ならむといへり。

キノメノト　紀乳母

名は全子。嵯峨帝の孫源湛の妻にして、陽成帝の御乳母となり、元慶六年從五位上に叙せらる。

キヨキ　潔興

宮道氏。昌泰元年内舍人となり、保明太子の帶刀たり。延喜七年貫之にかはりて、越前權少掾となる。

キヨユキ　清行

大納言安倍安仁の子。承和三年、文章生に補せられ、清和帝の代左衛門權佐、陽成帝の代右中辨、光孝帝の代陸奥守、宇多帝の代從四位上讃岐守に任ぜられ、昌泰三年卒す。年七十六。

クソ

源作が女。

クニツネ　國經

權中納言藤原長良の長子。基經の兄なり。夙に、顯要を經て、寛平年中權中納言兼大宰權帥、延喜年中大納言となり、同八年六月薨ず。年八十一。

クラ　内藏

本文、龍の字を書けるは誤。傳は未詳。或は曰く、大納言源定の孫にして、大和守綱の女と。

クロヌシ　黒主

大友氏。近江國滋賀郡大友鄕の人にして、圓城寺の地主なり。郡の大領となり、八位に叙せらる。延喜中。宇多法皇、屢、石山寺に幸す。國司、その氏を勞せむことを思ふ。法皇、これを聞き、他國の奉邑の貢を以て幸し給ひぬ。國司、大に懼れ、亭を打出濱に造り、菊花を植ゑ、獨、黒主をして侍せしむ。黒主、さらに波まなくも岸を洗ふめり清清くは君とまれかし」の歌を獻ず。法皇、大に喜び、物を賜ひて賞し給へり。仁和、昌泰の大宴會の風俗歌を奉ず。

ケイシン　敬信

（ケウシン）見よ

ケウシン　敬信

藤原因香朝臣の妻にて、尼となりし人。或は曰く、小野千古が

母と。

ケンゲイ　兼藝

伊勢少掾古の二子にして、大和城上郡の人と。

コトナホ　言直

藤原氏。昌泰三年、因幡權掾、内豎頭に任ぜらる。

コマチ　小町

小野氏。この人にかゝれる傳説は、大抵虚妄なり。出羽の郡司の娘といへるも據なし。この集、及び、後撰集に、小町が姉小町が孫なども見ゆれば、夫も、親屬もありけるなり。又小野真樹と詠みかはし歌あれば、これも親屬にて、近江の小野より出でたる氏ならむか。時代は、廉秀、遍昭等と歌よみかはししに見れば、文德の頃の人にて、清和の御字までもありし人にや。歌は、今の京、この方に及ぶ人なし。伊勢の御も名高けれど、小町には劣りたりと、眞淵の評せるが如し。

コマチガアネ　小町姉

傳未詳。

キヨキ　清樹

橘氏。阿波守にて、昌泰二年三月卒す。

コレタカノミコ　惟喬親王

文德天皇第一の皇子、母は紀靜子。貞觀十四年七月出家。法名算延。寛平九年二月薨ず。比叡山の麓小野に籠りましける故に、小野宮と申し奉る。

コレモト　惟幹

藤原氏。六位陸奥掾。

コレヲカ　惟岳

維熙と書く由、目錄に見ゆ。紀氏。無官の六位とぞ。

コンキンノミギノオホイマウチギミ　近院右大臣

源能有。文德帝の皇子。寛平九年六月薨ず。年五十三。近院の家は、拾芥抄に、春日北、烏丸東號「松殿」と見えたり。

サキノオホキオホイマウチキミ　前太政太臣

藤原良房。右大臣冬嗣の子、天安元年太政太臣に拜せらる。尋いで、從一位となる。貞觀十三年三宮に准じ、年官年爵を賜はる。十四年九月薨ず。年六十九。忠仁公と謚す。世に染殿の大臣と呼べり。

サダカタ　定方

内大臣藤原高藤の二子。延喜のはじめ、左近少將、近江介、延長二年、大納言より右大臣に任ぜらる。承平二年八月薨ず。年六十三。從一位を贈らる。三條右大臣と稱す。

サダキ　貞樹

小野氏。石見王の子。嘉祥二年春宮少進となり、後、甲斐守に





再任して、貞觀二年肥後守に進む。

サダブン　貞文

又、定文。刑部卿茂世王の孫、左中將平好風の子。容姿、美にして、平仲の艶名世に高し。左兵衛佐、三河權介となり、延長元年九月卒す。

サヌキ　讃岐

讃岐守安倍清行の女。

サネ　實

參議左衛門督源舒の二男。寛平中、藏人、左近衛少將を經て、昌泰二年信濃守となり、同三年卒す。

サンデウノマチ　三條の町

從四位上紀靜子。名虎の女なり。文德帝の更衣となり、惟喬、惟條親王、及び、三内親王を生む。貞觀八年二月卒す。

シゲカゲ　滋蔭

小野氏。播部頭にて、寛平八年卒す。

シゲハル　滋春

在原業平の二子。大和物語に、在次君とかける人。

シヨウエン　勝延

笠氏。寛平中律師となり、昌泰元年少僧都となる。延喜元年二月入滅す。年七十五。紀氏にて、承均法師の兄なりといふ説もあり。

ショウホウ　聖寶

光仁帝第一の皇子春日親王の後、兵部大丞葛聲王これなり。出家の後、寛平六年權律師、延喜元年東大寺大別當となり、同二年僧正になさる。同九年七月入滅。年七十。或は曰く七十六。

シロメ　白女

大和物語に、源告（ツゲル）が女にて、攝津江口の遊女なる由見えたり。これを、大江玉淵の女といへるは、大鏡などに、白女の歌を、玉淵の女の歌と並べ擧げたるより、誤れるならむ。同書に「亭子院の、河尻におはしましゝに、しろといふ遊もの召して、御覽じなどせさせ給ひて、遙に遠く侍ふよし、歌に仕うまつれ、と仰言ありければ、詠みて奉りける「須千島とびゆくがぎりあればこそ雲たつ山をあはとこそ見れ、いみじうめでさせ給ひ、物かづけさせ給ひき」と見えたり。

シンセイ　眞靜

たゞし、靜は、學音にショウと讀まれば、法師名に相かなはず。或は、眞勢か。御導師に補せらる。河内國の人とぞ。

シンタイ　神退

近江國滋賀郡の人。文德實錄に、嘉祥三年五月、雨を祷らしめ給ふに、時に應じて雨ふる。その日、諸神の爲に、七十人を僧となし、おの〳〵、神の字を冠らしめて、名となさせ給ふこと見

たり。この法師も、その一人なるべし。

スガネ　菅根

右兵衛督藤原良尚の子。元慶に文章生に補せられ、昌泰に文章博士となる。菅原道眞の左遷の時、これを救はむとて、宇多法皇の叡内せられしに、菅根、藏人頭にてこれを奏上せざりし科によりて、罪せられしが、直に本官に復し、官參議にいたる。延喜八年七月卒す。年五十四。從三位を贈らる。

スガハラノアソン　菅原朝臣

菅原道眞なり。かく、氏姓をのみかけるは、異體なり。左遷の厄に遭ひて、延喜三年二月、太宰府にて薨ず。年五十九。その後、延長元年本官に追復し、正二位を贈らる。この集の頃は、未だ、その恩赦得ざりしころなれば、かくは書けるか。傳は、人の、遍く知るところなれば略く。

セキヲ　關雄

刑部卿藤原眞夏の五子。天長二年文章生の試に及第す。よく、文を屬し、性、閑適を好み、東山の蓬居に籠れるを以て、東山進士と呼ばる。その蓬居は、後の禪林寺、今の永觀堂の地なり。承和中、淳和上皇の徵により、遂に出で仕ふ。累遷治部少輔兼齋院別當となり、仁壽三年二月卒す。年四十九。關雄、また、琴を能するを好み、又草書を能くす。

ソウク　承均

元慶の頃の僧。或抄に、貫之の甥といへり。

ソセイ　素性

遍昭在俗の時の子にして、名を弘延といひ、清和の御時の殿上人なり。大和物語に、遍昭のことないひて「世にいますかりける時の子どもありけり。太郎は、左近將監とけて、殿上してありけり。かく、世にいますかりときく時だにとて、毋もやりたりければ、いきたりけるに、法師の子は、法師なるぞよきとて、これも、法師になしてけりと見えたり。石上の良因院に住せしに、宇多上皇、宮瀧遊覽の序、住所の名をとりて、良因朝臣と召され、和歌を献ぜしめられき。又、延喜中、屏御屏風に書し、又歌を献じたり。

ソトホリヒメ　衣通姫

允恭帝の妃にして、忍坂大中姫皇后の妹なり。名は弟姫。その容姿艶妙にして、光、衣を徹ししより、世人「ソトホシノイラツメ」と稱せり。

タイスケ　大輔

但馬守源弼が女。

タカムラ　篁

參議小野岑守の子。弱き時、父の任に從ひて、陸奥にありて、弓馬を事としたりき。京に歸りて後、學問に志し、途に、文章生より出でて、數多の官を經て、大宰少貳となりしが、遣唐使の時、大使と爭ひ、言不敬にわたり、流人となりしを、その





三年目、召還せられて、本位に復り、すゝみて參議左大辨にいたり、仁壽二年十月薨ず。詩を巧くして、樂天と、その歸を同じうすといはれ、野相公の名、世に噪し。然れども、性狷介にして、人、容れず、爲に、野狂の名を得たり。狂と篁と、頗相通ずるなり。

タカヨ　高世

參議菅野眞道の子。弘仁十一年周防守に任ぜらる。

タヾオン　直臣

菅野氏。三代實錄元慶三年十一月の條に、中宮大進菅野朝臣直臣に、從五位下を授くること見えたり。

タヾフサ　忠房

藤原氏。寛平中遣唐使判官となり、延喜のはじめ、大和守に任ぜらる。延長六年卒す。貫之の知人。吹笛の上手にて、胡蝶樂を作ると。

タヾミネ　忠岑

壬生氏。初め、藤原定國の隨身たり。後左近衛番長、右衛門府生、御厨子所預、攝津大目に累遷して、六位に叙せらる。歌道は貫之の門下といふ。この集撰者の一人なり。

タヾユキ　忠行

藤原氏。仁和三年土佐掾となり、累遷して、寛平中從五位下に叙せられ、昌泰三年遠江守、延喜五年若狹守となる。

チサト　千里

參議大江音人の子。延喜三年兵部大掾となる。

ツネミ　經覽

阿保氏。昌泰年中右少吏兼算博士となり、累遷、主税頭となりて、延喜十二年正月卒す。延喜六年の日本紀竟宴の歌の作者なり。

ツラキ　列樹

春道氏。延喜十年文章生に補し、同二十年壹岐守となり、未だ發向せずして卒す。この人氏名相配して意義をなせり。

ツラユキ　貫之

紀氏。この集の序に御書所預、次いで內膳典膳、少內記、大內記、加賀、美濃の介、大監物、右京亮をへて、延長八年土佐守、天慶三年玄蕃頭、同八年木工權頭、同九年卒す。寛平后宮歌合の時を、その若盛と見る時は、七十餘ばかりの齡ならむ。萬葉集の後を承けて、それに勝るばかり、秩序整然たるこの集を撰びて、後世撰集の模範を示したるは、全く、この人の力なり。然れども、流石に、他にも撰者のあることなれば、まゝ心ゆかずやありけむ、天慶中、更に「新撰和歌」を撰し、漢文の自序を添へたり。而して、この集の序、並に大堰河行幸序、及び、土佐日記は、その國文の妙手たることを証せり。書道、また、奥妙に達し、その假字書は、實に入神の筆なり。

トシサダ　利貞

紀氏。貞觀の末少内記、元慶のはじめ大内記、同五年阿波介にて卒す。

トシハル　利春

高向氏。寛平二年刑部丞に任ぜられ、延喜、延長の間、武藏、甲斐の國守を歴任せり。

トシユキ　敏行

陸奥出羽按察使藤原富士麻呂の子。清和帝の代に出仕して、宇多帝の朝、近衛中將、藏人頭を經て、從四位上右兵衛督にいたり、昌泰四年卒す。或はいふ、延喜七年卒すと。書道の名手。

トモノリ　友則

紀氏。土佐掾となり、少内記にすゝむ。延喜の初大内記に轉じ、六位に叙せらる。この集の撰者の棟梁たり。但、いまだ稱了せざるうちに卒去せしものと見えて、哀傷の部に、その悼歌見えたり。

ナカキ　中興

平氏。忠望王の二子、實は右大辨秀長の一男と。昌泰に藏人となる。それより、荐に國守を歴任して、延喜十九年左衛門佐、廿二年美濃權守に任ぜらる。

ナカヒラ　仲平

關白藤原基經の子。昌泰の末藏人頭たり。承平七年左大臣となり、天慶五年正二位にのぼる。八年薙髮して靜寛といひ、翌いで薨ず。年七十二。世に枇杷大臣と稱す。



ナカマロ　仲麻呂

中務大輔安倍昭守の子。寶龜二年年十六、遣唐留學生となり、唐にありて、力學、大に得るところあり。名を朝（又晁）衡と改め、秘書監に進み、衛尉卿を兼ね、頗る重用せらる。勝寶年中、遣唐大使藤原清河來る。共に歸らむことを請ひ、明州に至る。王維、包結等、贈るに、詩を以てせり。仲麻呂、月を望みて「天の原ふりさけ見れば」の歌を詠じ、漢譯して示したるに、衆嘆賞せざる者なし。乃ち別れて、海に航し、颶風に遇ひて、安南に漂著す。唐人以爲く、仲麻呂溺死せりと。李白、詩を作りて慟哭す。こゝに於て、仲麻呂、再び、唐に還り、左散騎常侍、安南都護に任じ、光祿太夫、御史中丞、北海郡開國公に至り、三千戸を食む。寶龜元年正月年七十を以て卒す。代宗の代、潤州大都督を贈る。承和三年、遣唐使に因つて、正二位を贈らるといふ。

ナガモリ　長盛

橘氏。延喜中五位長門守に至る。文章博士直幹の父。

ナザネ　名實

矢田部氏。元慶八年文章生に補せられ、累進、六位の大内記となりて、昌泰三年卒す。

ナホイコ　直子



藤原氏。貞觀の末に從五位下、延喜のはじめ正四位下に叙せらる。典侍。

ナラノミカド　平城の帝

桓武天皇の第一の皇子。延曆四年立太子、大同元年五月卽位、同四年四月讓位、弘仁元年出家、天長元年七月崩ず。御年五十一。

ナリヒラ　業平

阿保親王の第五子、兄等と共に、在原朝臣を賜はる。貞觀中右馬頭に任ぜられ、又勃海國の使を勞す。元慶中右近衛中將に進み、尋いで相模美濃守を兼ね、同四年五月卒す。年五十六。世に、在五の君、在中將と稱す。二條后の入内前、これと通じ、相携へて逃亡し、捕へられて、髮を斷たれて放たれしは、世に有名なり。國史に、「體貌閑麗、放縱不拘、略有二才學、善作二和歌一」と見えたり。蓋し、和歌は、人麻呂以後一人なり。後人、加茂の岩本に、祠を立てて、その靈を祀る。業平、又膂力あり、曾て、宇多帝の、未だ微なりし時、共に殿上に相撲ひ、帝を、御椅子に投げかけて、その勾欄を折りしとぞ。

ナリヒラノハヽノミコ　業平の母の親王

桓武帝第七の皇女伊登内親王。阿保親王に適き、行平、業平を生む。貞觀三年九月薨ず。

ニデウ　二條

大納言源定の女とも、又、定の孫宿の女ともいへり。

ニデウノキサキ　二條后

贈太政大臣藤原長良の女にして、名は高子。清和帝の女御となり、陽成帝を生めり。元慶元年に立后、其の後、東光寺の僧善祐と姦し、寛平八年に后位を停められしが、朱雀帝の天慶六年に、本位を復せられぬ。また入内前、在原業平に通ぜし傳說あり。

ニンナノミカド　仁和の帝

光孝天皇。御名は時康。仁明帝第三の皇子なり。文德、清和、陽成の三朝に歷仕して、一品式部卿に任ぜらる。陽成帝位を遜るゝや、藤原基經、帝を迎へて、これを立つ。在位三年にして崩ず。御年五十八。世に、小松の御門と申す。

ノチカゲ　後蔭

中納言藤原有穗（又有種）の二子。延喜十九年從四位下備前權守

ノボル　登

仁明帝の皇子なりしが、世三國の町の過失によりて、出家して、深寂と號す。貞觀八年還俗して、貞朝臣を賜はる。寛平五年紀伊權守、同六年正五位下に至る。

ハルカゼ　春風

小野氏。累世の將家にして、元慶年中鎭守府將軍兼相模介に任ぜられ、藤原保則とはかりて、奥羽の叛賊を平ぐ。寛平二年右近衛少將陸奥權守となる。その撿非違使たりし時、參議源光が、禁色を著せしをせめて、服用せざらしめ、論者の偉とするとこ

ると

ヒガシサンデウノヒダリノオホイマウチギミ　東三條左大臣

源常。嵯峨帝の皇子にして、正二位左大臣となり、齊衡元年六月薨ず。年四十三。性雅量寛弘、宰相の才能、尤も備はれりといふ。

ヒダリノオホイマウチギミ　左大臣

藤原時平。昭宣公基經の太郎なり。仁和二年殿上にて、元服を加へられ、續いて、顯要を經て、昌泰二年左大臣に任ぜられ、後正二位に至る。延喜九年四月薨ず。年三十九。正一位太政大臣を贈らる。本院大臣と稱す。

ヒデヲカ　秀崇

良岑氏。元慶三年文章生に補せられ、寛平八年正月伯耆守に任ぜらる。

ヒトザネ　人眞

酒井氏。寛平中蔭叢採、延喜十四年土佐守に任ぜられ、同十七年四月卒す。

ヒヤウエ　兵衛

右兵衛督藤原高經の女。大和物語に「忠房が許に侍りける兵衛」とある人なるべし。さては、藤原忠房が家人なり。「衆平朝臣家に侍りける女」といへる詞書に準へて、忠房の妹かといへる説もあれど非なり。又、後撰集、拾遺集に見えたる藤原兼茂の女なる兵衛は、別人ならむ。



ヘンゼウ　遍照

（ムネサダを看よ。遍昭と書くに通用なり

ホドコス　恵

大納言源弘の孫。延喜四年主殿助に任ぜらる。延長六年丹波守に任ぜられ、同九年卒す。

マサズミ　當純

右太臣源能有の五子。寛平昌泰の間、大皇太后宮少進、大藏少輔、縫殿頭を經て、延喜元年攝津守、同二年少納言に任ぜらる。

ミクニノマチ　三國の町

三國は氏、町は名。仁明帝の更衣、貞朝臣登の母。

ミチノク　陸奥

從五位下橘嘉直の女。

ミツネ　躬恒

凡河内氏。寛平中甲斐掾少目となり、延喜の朝に召されて御書所に候し、御厨子所預にうつり、和泉の大掾となる。歌道の名手として、貫之と雄を爭ひ、論客、その輕薄すべからざるをいへり。この集の撰者の一人なり。



ミネヲ　岑雄

上野氏。承和の頃の人とぞ。

ムネサダ　宗貞

大納言良岑安世の男。仁明帝の世、蔵人頭にて、寵幸を得たり帝崩ぜらるゝや、出家して、遍昭と號す。今昔物語に、良岑少將は、文德帝の太子の時、おぼしめしに協はず、仍て、仁明帝の崩後、出家したる由見えたり。さる事もやありけむかし。元慶、仁和の間僧正に任ぜらる。光孝帝、特に、その七十賀を、仁壽殿にて行はせ給ひ、又、食邑百戸を給ひ、盤車宮門に出入するを許し給ひぬ。寛平二年正月入滅す。年七十六。花山の元慶寺の座主たるが故に、花山の僧正と稱す。

ムネハリ　棟梁

在原業平の一男。清和、陽成、光孝、宇多、醍醐の五朝に仕へて、東宮舍人より、筑前守にいたり、昌泰元年卒す。この人の名、古くムネヤナと訓めるは非なり。棟梁之材などいふ義に取りたるにて、ムネとハリとなり。ヤナは、魚を捕る具にて、棟には熟せず。

ムネヤナ　棟梁

（ムネハリ）を見よ。

ムネユキ　宗于

光孝帝の皇子是忠親王の子。寛平六年源朝臣を賜はる。延喜の頃、荐に國司を歴任し、從四位下右京大夫に至りて、天慶三年に卒す。

モチユキ　茂行

又望行。紀氏。承和の頃の人にて、六位とぞ。

モトカタ　元方

筑前守在原棟梁の子。その妹大納言藤原國經の妻たるによりて國經の猶子となれりとぞ。

モトノリ　元矩

又元規。平の中興の男。延喜元年左衛門少尉、同六年蔵人、同八年從五位下に叙ぜられ、幾くもなくして卒す。奥儀抄には、蔵人右衛門尉基範とあり。

ヤスヒデ　康秀

文屋氏。字を文琳といふ。貞觀二年刑部中判事、後三河掾にうつり、元慶元年山城大掾、同三年縫殿助となる。春上の詞書の趣に從へば、この頃、六七十の間なりしならむ。

ユキヒラ　行平

平城帝の長子阿保親王の子。天長三年、父親王の奏によりて、仲平、業平の兄弟と共に、在原朝臣を賜はる。仁明より宇多まで六朝に歴仕して、正三位中納言兼按察使となる。寛平五年卒す。年七十六。國史その經濟の才に長じて、且、風流の聞あることをいへり。

ヨシカ　良香

桑原秋成の子。弘仁中、氏を都と改めき。良香、はじめ、名を言道といひしを、渤海國の使を掌りし時「姓名相配、其義乃美」とて、改めたり。貞觀二年文章生に補せられ、累進して、文章博士從五位下兼大内記越前權掾となり、元慶三年二月卒す、年三十六、その詩作、警句多し。「氣凌風梳新柳髮、波洗三萬古苔鬚」この類、これなり。

ヨシカゼ　良風

一に好風、右近衛少將兼陸奥守藤原滋實の子。寛平、延喜の間、左兵衛右衛門の尉を歷任し、春宮の帶刀たり。のち出羽城介に至る。

ヨシキ　美材

小野篁の孫。寛平中文章生に補せられ、後、諸官を經て、筑前守兼太宰少貳となり、延喜十年正月卒す。或は、延喜二年卒すともいふ。

ヨシナ　良名

物部氏。六位の人とぞ。

ヨシヒト　淑人

中納言紀長谷雄の二子。延喜九年左近將監、天曆二年河内守に至る。

ヨシモチ　淑望



中納言紀長谷雄の子。或はいふ、貫之の猶子とぞ。この集の、漢文の序を撰ぶ。寛平八年文章生、のち大學頭、東宮學士を經、信濃權守を兼ぬ。延喜十九年卒す。

ヨルカノアソン　因香朝臣

藤原高藤の女とぞ。貞觀中從五位下に叙せられ、寛平九年十一月從四位下掌侍となる。後典侍になされたるならむ。母は尼藤信なり。

ヨロヅヲ　萬男

難波氏。傳未詳。

ヲムネ　雄宗

下野氏。傳未詳。

187
159

明治四十年十二月三十日印刷
明治四十一年一月五日發行

●全五册
定價　一、二各四拾錢　三、四各拾五錢　五　金五十錢

不許複製

著者　東京市本郷區弓町一丁目十二番地　金子元臣

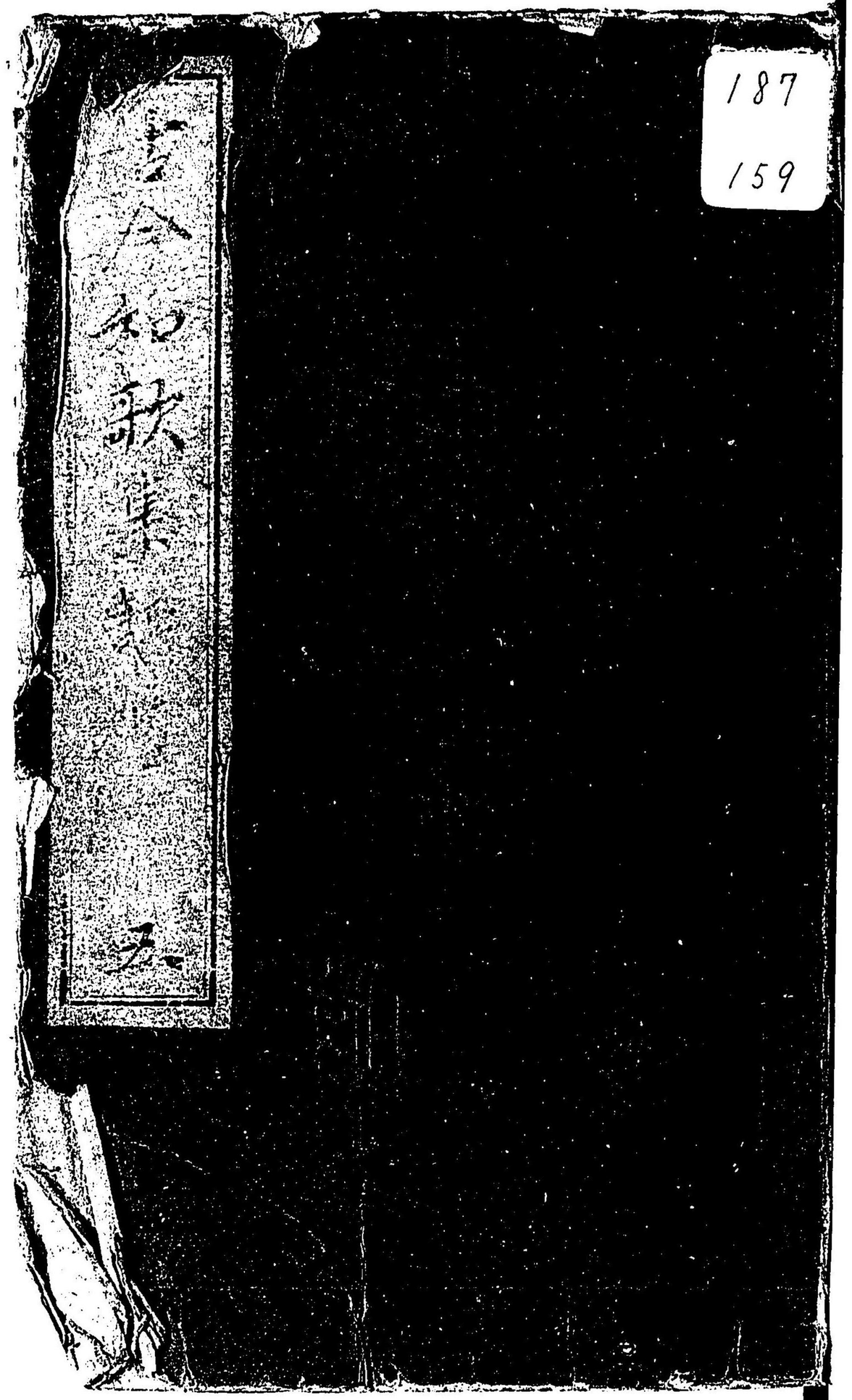
發行者　東京市神田區錦町一丁目十番地　三樹一平

印刷者　東京市神田區表神保町二番地　三島宇一郎

印刷所　東京市神田區表神保町二番地　弘文堂

發行所　東京市神田區錦町一丁目　長電話本局二四三八番　明治書院

187
159



187
159